

TAKU FREE

# BLUE+ GREEN JOURNAL

Okutama Town Official Magazine  
奥多摩町公式タブロイト

奥多摩を読む、奥多摩で読む。  
The Art of Reading

#17

ISSUE Seventeen



## 奥多摩を歩くためのブックガイド

「本を通して奥多摩を知ること、町を歩く楽しみが増えるんです」と語るのは、歴史・文化から自然まで奥多摩にまつわる本を広く深く愛読する奥多摩観光協会の矢作佑允さん。38冊におよぶ秘蔵本を紹介してもらった。

### 先人の記録や郷土研究から歴史を知る

①『奥多摩町誌』奥多摩町誌編纂委員会 編纂（奥多摩町）昭和60年に町が出版した奥多摩郷土研究の集大成。自然編、民族編、歴史編がある。奥多摩町誌編纂委員長の大館勇吉氏は、奥多摩の地域ごとの歴史を記録した⑥『奥多摩風土記：歴史・民俗・風土』（有峰書店新社）の著者であり、日原の文化を記録した⑤『日原風土記』の編集委員のひとりでもある。また、同じく奥多摩町誌編纂委員のひとりだった安藤精一氏は、⑦『奥多摩歴史物語』（百水社）の著者であり、④『奥多摩郷土小誌』にも携わっている。これらを読めば、いくつもの村の集まりだった奥多摩が、いかにして今のかたちになったのか変遷がわかる。

②『武蔵田園簿』北島正元 校訂（近藤出版社）江戸幕府誕生から30年後くらいに編まれた書物の復刻版。村々の石高や領主、土地の状態などが一覧になっている。なお、当時の奥多摩の村々は畑ばかり。

③『小河内村報告書』（小河内村役場）小河内ダム建設にあたってつくられた昭和13年の本。ダムにまつわる情報を中心。

### 著者の目線で奥多摩紀行を楽しむ

⑧『汽車が好き、山は友だち』長谷川末夫 著（草思社）戦前・戦中・戦後を生き、汽車と山が大好きだった著者が、輪行で山々をめぐるエッセイ。奥多摩も描かれている。

⑨⑩『多摩源流を行く』『奥多摩町異聞』瓜生卓造 著（東京書籍）多摩川の源流部へと向かいながら、奥多摩の各地域の人々に暮らしや歴史の話を聞いた記録。昭和当時の様子がうかがえる。

⑪『奥多摩 山、谷、峠、そして人』山田哲哉 著（山と溪谷社）奥多摩に通って50年以上という山岳ガイドが、個性的な山々を紹介。

⑫『山を行く』高畑棟材 著（朋文堂）大正から昭和の頭にかけて東京近郊の山を歩いた登山家の記録。『奥多摩の山水』という章がある。

⑬『復刻版 奥多摩』宮内敏雄 著（百水社）宮内氏が奥多摩について調べたもので、地名の由来などの資料としても優れている。

### 古きマップから見る奥多摩のいま昔

⑭⑮⑯昭和の時代のマップやガイド本。奥多摩周遊道路がまだ開通しておらずダム街橋が生活道路として使われていたり、植林した木が成長する前で山の見晴らしがよかったりする。

⑰『多摩おもしろまっづ 情報わんさか』タウンガイドマップ編集部 編（京王出版）約35年前の写真つきガイド本。いまと比べるとおもしろい。百尋ノ滝も当時は2段だった。

### 町のコンテンツカを感じる多様なテーマの本

⑱『高尾・奥多摩 植物手帳』新井二郎 著（JTBパブリッシング）高尾と奥多摩の植物を約400種掲載。登山やハイキングのおともに。

⑳『関東周辺 美味し愛しの下山メシ』西野淑子 著（山と溪谷社）テレビドラマ「下山メシ」の原作。奥多摩の山も出てくる。

㉑『記憶に残る廃村旅』浅原昭生 著（実業之日本社）全国の廃村を紹介している本で、奥多摩の峰と倉沢が掲載されている。

㉒『奥多摩の民衆芸能と山』渡邊唯夫 著（文芸社）奥多摩に魅入られた著者が、実際に奥多摩に足を運び民俗芸能を調べたもの。

㉓『東京都の中世城館』東京都教育委員会 編（戎光祥出版）㉔『東京・埼玉の城郭』児玉幸多・坪井清足 監修（新人物往来社）奥多摩に存在する将門伝説や城跡も掲載されており、城好きにはたまらない。

### 移住者の視点から町を再発見する令和の本

㉕『クリエイティブを旅する 東京最西端物語』錦柄大気 著（西の風新聞社）奥多摩エリアで創作活動や飲食店経営などを行う17組のインタビューと、町長も登場する3つの対談を収録。

㉖『自分の地域をつくる ワーク・ライフ・プレイミックス』菅原和利 著（本の種出版）多摩産材の活用等を手がける「東京・森と市庭」取締役による地域ビジネスの本。

㉗『お気軽移住のライフハック100』宇都宮ミゲル 著（集英社インターナショナル）本誌の編集・制作を手がける編集プロダクション「ミゲル」代表による移住指南。

### 町で活躍した重要人物を知る

㉘『山河ありて』（金子健一翁顕彰会）奥多摩わさび本舗「山城屋」の初代代表である金子健一氏の生き様が綴られている。

㉙『昭和史の隠れたドン』西まさる 著（新葉館出版）映画「唐獅子牡丹」で高倉健が演じた主人公のモデルとされる飛田東山氏についての本。青梅に居をかまえ、小河内ダムの建設に大きく貢献した。

### 山を知りつくした人に教わる

㉚『奥多摩の花・動物・自然・樹』（のんぶる舎）奥多摩に生まれ、奥多摩の山に通い続けたという堀口行雄氏の著書。氏は定年後、奥多摩観光協会の臨時職員としても活躍中。

㉛『雲取山の歩き方 新井信太郎と9人の仲間が選んだ26コース』（けやき出版）山小屋「雲取山荘」の主人として、約50年間雲取山を見続けた新井信太郎氏による、雲取山案内。

㉜『悔るな東京の山』（山と溪谷社）㉝『すぐそこにある遭難事故 奥多摩山岳救助隊員からの警鐘』（東京新聞出版局）㉞『奥多摩登山考』（東京都公園協会）山岳救助隊をしていた金邦夫氏が、さまざまな事故の事例を紹介。山の事故について知りたければこれ。

### 「多摩川の上流」というアイデンティティー

㉟『多摩川をいく』平野勝 著（東京新聞出版局）平成13年発行の多摩川流域のスポット紹介。旅館「荒澤屋」なども登場している。

㊱『多摩川物語』根岸律男 著（日本随筆家協会）昭和初期に書かれており、いかだで材木を運んでいた時代の淵の呼び名なども載っている。

㊲『多摩川絵図 今昔 源流から河口まで』今尾恵介 著（けやき出版）江戸名所図会に描かれた当時の多摩川と、現在の多摩川と比べて楽しめる。

矢作さんの

## BEST3冊



『復刻版 奥多摩』宮内敏雄 著（百水社）「宮内本」と呼ばれる奥多摩研究の名著。初版は昭和19年発行だが、現在も奥多摩の地名を調べるときなどに基礎資料となる。



『汽車が好き、山は友だち』長谷川末夫 著（草思社）情報源というよりは、読み物として優れており、旅をする楽しさを思い出させてくれる良書。著者の飾らない語りにも好感が持てる。



『奥多摩町誌』奥多摩町誌編纂委員会 編纂（奥多摩町）知識と編集力を備えた先人たちが、総力をあけて完成させた町誌。このおかげで、奥多摩について幅広く正確な情報を得られる。

教えてくれた人



PROFILE

矢作佑允さん

奥多摩観光協会の職員。2011年より奥多摩の観光業に携わり、奥多摩の本を読みはじめる。本の内容を思い出しながまちを歩くことが好き。



# The Art of Reading

奥多摩を読む、奥多摩で読む。

耳に届くのは、小鳥のさえずりとせせらぎの水音。

窓から目を転じれば、すぐに鮮やかな緑や青の風景が飛び込んできく。

自然あふれるこの町は、アウトドアやキャンプのみならず、

実は読書に最適な場所だとも言えるだろう。

近年、ユニークな形で芽生えつつある奥多摩発のブックカルチャーを巡ってみた。





# OKUTAMA Book Culture Journey 01

## 本の居場所

## 奥多摩ブックフィールド

奥多摩湖畔にある旧小河内小学校。この場所に、愛書家や編集者たちが集うディープなブックスペースがある。全国でも唯一無比の“本の居場所”を訪ねた。

### 貴重な蔵書1万5000冊以上をアーカイブして一般公開

古本屋のようであり、図書館のようでもある。そんな「奥多摩ブックフィールド」があるのは、旧小河内小学校を活用した「奥多摩フィールド」の一角。職員室、校長室、家庭科室を使い、本に関する画期的な取り組みが行われている。

仕掛け人は、一般の人が自分のスタイルで本をシェアする「まちライブラリー」の提唱者である磯井純充さん。自身にとって癒しの地である奥多摩に拠点をつくりたいと、旧小河内小学校を訪れたのがきっかけだった。湖畔にある廃校の雰囲気よさに惹かれ、「この場所でまちライブラリーをしたい」と強く思ったそう。

思いが叶ったのは2018年のこと。旧小河内小学校の一部を借りるチャンスを得た磯井さんは、ちょうどその頃に蔵書の置き場を探していた3名を誘った。みなふたつ返事でこれに乗り、まちライブラリーに置く本が決まった。そうして

彼らの本が大量に運び込まれ、奥多摩ブックフィールドが誕生した。以来、毎月第一土曜日にオープンし、1万5000冊以上にのぼる蔵書を公開。トークセッションなどのイベントも開催している。貸し本棚に置く本も募集中だ。

奥多摩ブックフィールドの蔵書の内容は、多岐にわたる。まず、「専門家のマイクロライブラリー」を主宰する力徳裕子さんが持ち込んだのは、大学教授である父親や、各分野の専門家たちの蔵書。また、会員の傍ら「本屋さんウォッチャー」として活動しているどむかさんが、メディア関連・サブカル本などのコレクションや展覧会図録を、元美術系出版社の会社員吉田茂治さんは、美術関連本などを置く。さらに2020年に廃業した出版社「出版ニュース社」が刊行していた、出版文化総合誌「出版ニュース」や「出版年鑑」などの貴重なバックナンバーをアーカイブしている。加えて、知人たちから引き取ったいくつものコレクションも。じっくり見たら1日では足りない量の本が奥多摩ブックフィールドに集まっている。

「古本屋や図書館などは、価値のある本だけ欲しがります。でも、蔵書をバラバラではなくまとまった状態で置くことに意義がある」と、どむかさんは言う。例えば、ひとりの学者の本棚。研究のために集めた本一式を見ることで、著書を執筆するためにどんな関連本をどれだけ読んでいたのか、知の軌跡を辿ることができる。

蔵書の置き場を探し、さまざまな自治体に声をかけてきた力徳さんは、旧小河内小学校を見た瞬間にびったりだと感じたそう。「まず、東京の里山で、公共交通機関で来られるところがいい。それに、学びの場である学校と本は、親和性が高いですね。木造校舎で、近くに湖がある環境も、紙は木と水からできているので、調和するものがあると思いました」

磯井さんは、奥多摩に「本をアーカイブする場」としての可能性を感じているという。「出版社や印刷会社、クリエイターが多い東京は、出版が地場産業です。でも、本をつくって流通させるまでで終わり。その後の本をどうするか

は考えられていません。だから、奥多摩で引き受けたらどうかと思うんです。そうすれば、奥多摩にとってもインドアの観光資源になる。関係人口が増えて、移り住む人も出てくるはず」

奥多摩が本の居場所となり、本の文化を育む未来。それが、奥多摩ブックフィールドではじまっているのかもしれない。



住所:奥多摩町留漣1237旧小河内小学校内  
基本開室日:毎月第1土曜日  
※詳細はFacebookにて要確認  
<https://okutama.org/>



### まちライブラリーとは

メッセージをつけた「本」を通じて「人」と出会うまちの図書館。2011年に磯井純充さんがはじめ、個人や団体が、自宅や店舗、病院、学校などの一角に本棚を設置。全国に広がり、現在国内外に約1200か所ある。方法に縛りはなく、いつでも、誰でも、どこでもスタートできる。奥多摩ブックフィールドもまちライブラリーのひとつ。<https://machi-library.org>



学者や専門家が残した行き場のない蔵書を、「知の集積」として活用するプロジェクト。洋書や古書、珍しい本も多く、その分野にうとくても、見て、触れて、楽しめる。<https://zo-sho.org>

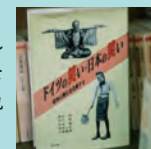
## micro library



東大の教授でドイツ文学や歌曲の研究をしていた故・石井不二雄氏の蔵書の一部。40年ほど自宅で死蔵されていたものが、ここで息を吹き返した。大正期の凝った革の装丁や、何語で書かれているかわからない洋書など、異なる時代や文化を感じられる。



力徳さんの父親でありドイツ文学の教授である保坂一夫氏の蔵書の一部。共著「ドイツの笑い・日本の笑い:東西の舞台を比較する」や氏が寄稿した新聞記事、それらを書く知識の元となった本を手にとれる。書き込みも、知の軌跡として見ると味わいがある。



## 個性豊かでどれも気になる！

## 奥多摩ブックフィールドの本棚

各方面から集まった本を収めているため、一見雑多に見える本棚。しかしよく見ると秩序があり、きちんとコーナー分けされている。



どむかさんとコレクション仲間である加茂大介氏が集めた全国の書店のブックカバーを地域別・モチーフ別にファイリング。膨大な量がよい状態で保管されており、コレクターの情熱が伝わってくる。



「日月堂」は、かつて表参道・根津美術館前に実店舗を構えていた知人ぞ知る古書店。トレードカラーである赤い色の本棚やカウンターをどむかさんが譲り受け、在りし日の同店の雰囲気再現している。



どむかさんが展開する古書店のコーナー。代金は専用の容器に入れる仕組み。小説のサイン本や、ミニコミ誌、ZINEなどのほか、雑貨やトートバッグといったオリジナルグッズも販売している。



本をモチーフにしたオブジェやブックエンド、絵画作品など、どむかさんが集めた本にまつわるコレクションを並べている。本の形をしたさまざまなパッケージを並べた棚は、本物と見紛う。



1985～1999年という雑誌の黄金期に発刊された、あらゆるジャンルの創刊号1357冊。出版界の研究機関が手放したもので、これだけ多くの創刊号を気軽に手にとれる場所はほかにはない。



1975～2019年の年間ベストセラーを年ごとに並べている。分厚さや装丁など、データではなく実物の本を見るからこそ知れることも多い。眺めていると、半世紀近い時代の流れを感じられる。



旧家庭科室に44の本棚を設置し、1棹ずつ貸し出しを行なっている(月額2,000円～/1棹)。カウンターや椅子もあり、愛蔵する本やコレクションを置いて通えば、ちょっとした自分の居場所ができる。



## OKUTAMA Book Culture Journey 02



救い出した本を、  
好きなまちで売る。

奥多摩好きがこうじて  
古書店をはじめた岡村ひろみさんに、  
「おくたま文庫」の現在地をうかがった。



「カフェアラ」内。岡村さん作のフリーペーパー「奥棚」も



絶景を望む「KIKORI CAFE」は、読書にも最適な空間



「KIKORI CAFE」内のおくたま文庫コーナー

### リアルな本屋だからできる “偶然の出会い”が生まれる仕掛け

「おくたま文庫」の本棚には、小説やビジネス書、料理本、絵本など幅広いジャンルの本が並ぶ。店主の岡村ひろみさんはこう話す。「選り抜いた本を置いて、自分の色が出るようにしていません。メインは私じゃなく本とお客さんだから、誰でも気軽に手にとれる雑多な感じをあえてつくっています」

岡村さんはふだん、古本のネット販売をしている会社でデザイナーとして働いている。「おくたま文庫」は、岡村さんが週末を中心に行う副業でありライフワークだ。発端は、会社で大量の古本が廃棄されていることだったという。「厚くて送料が高つく本や、ベストセラーで市場に大量に出回っている本などは、捨てられてしまいうです。回収業者が来て本をバンバン投げているのを見るたびに、すごく心苦しくて、どうにかしたいと思いました」

そんな折、お子さんが小学校に上がり、それまでは親子でカヤックやキャンプに奥多摩

に通っていたが、その機会が減ってしまったという。

「私は奥多摩が好きなので、もっと来たかったんですが、ひとりで来るのもなんだかなあ、と」その状況と、古本を救いたい思いが重なった。「こっちに居場所があって、少しでも収入になれば、奥多摩に通う理由ができる」。そう考えて、奥多摩で古本屋を開くに至った。

2021年の春、旅館「玉翠荘」の一室を間借りして、古本喫茶「おくたま文庫」がオープン。週末のみの営業だったにもかかわらず、1日30～40人のお客さんが訪れるようになった。店は1年契約で借りていたため2022年の春に閉じたが、同年の夏には、鳩の巣にオープンした「KIKORI CAFE」の一角に「おくたま文庫」の本棚を設けて委託販売をはじめた。さらにその翌年には町内の2か所のカフェや施設で選書を依頼された。現在岡村さんは、この3か所の本棚に本を補充するために奥多摩に通いながら、新たに店舗をかまえる物件を探している。

「おくたま文庫」の魅力のひとつに、ユニー

クな陳列がある。古典小説の隣に起業家のエッセイがあり、名言集の隣に生物学者が書いた新書があるなど、その並びは快く意表をついてくる。

「Amazon のレコメンドにはない、“偶然の出会い”が生まれる仕掛けをつくりたいいつも思っています。同じジャンルや思考の中で、いいとされる本ってだいたい決まっていて、SNSなどを見ると、そこから抜け出すのって難しいと思うんです。ここはリアルな場だからこそ、なんとなく手にとったものが、何かのきっかけになる経験をしてもらいたいです」

岡村さん自身も、そうした経験を持つ。もともと本を読む習慣はなかったが、あるとき何気なく読んだエッセイから、読書が好きになった。「エッセイはくだらない内容だったけど、そこに出てきた文豪の名前をメモして、今度はその人の本を読みました。私は白洲正子の本が大好きなんです、あのときエッセイを読まなかったら、たどり着けませんでしたね」

「おくたま文庫」の本は、何かいいことにつながる予感に満ちている。

### 古本と喫茶 おくたま文庫

Web: <https://okutamabunko.official.ec>  
Instagram・X: @okutamabunko  
note: <https://note.com/okutamabunko>  
FB: <https://www.facebook.com/okutamabunko>

#### 選書取扱店

- KIKORI CAFE TOKYO  
奥多摩町棚澤403
  - Satologue  
奥多摩町棚澤1番
  - カフェアラ  
奥多摩町氷川702  
氷川キャンプ場内
  - ぐらしの循環センター「フカダヤ」  
埼玉県飯能市仲町6-11
- ※店舗物件の情報募集中

## 本好き語らう、 読書会の一夜。

なにやら本好きが  
集っているらしいと  
噂の「おくたま読書会」に潜入。  
その魅力を探る。

### 忙しい日々読書の機会をつくり 読む楽しさを分かち合う

とある休日の夕刻、同じ本を携えた本好きたちが、ひとりまたひとりと集まってくる。「今回の章は読みにくかったね」などと言合いながら、おのおのがA4用紙のレジュメやパソコンを机に置き、おもむろに読書会がはじまった。レジュメに沿って内容を復習しながら、各自の解釈や意見を伝え合う。“読み”が深まるほどに、会は盛り上がっていく。

この「おくたま読書会」を立ち上げたのは、約4年前に奥多摩に移住してきた濱田隆史さんと黒木将器さん。当時から濱田さんが町外の読書会に参加していたことから、「奥多摩でも」と2人ではじめた。やがて3人、4人と本好きが加わり、3年目となる今では10名ほどに増えた。途中で、「全員が発言するには、4～5人がちょうどいい」と、チームを2つに分けた。

仕組みはこうだ。まず最初に、メンバー全員が次の課題図書候補を持参し、選書会を行う。各自が推薦する本をプレゼンし、そのなかから話し合いで2冊を決め、それぞれにメンバーを割り振りチームにする。次回からは、各チームでスケジュールを調整し、月に1回のペースで例会(読書会)を開き、4か月ほどで1冊を読み終える。例会では、毎回持ち回りでレジュメを用意し、例会の後の飲み会ではひとりずつ最近のオススメ本を紹介していく。ちなみに、飲み会のほうが本番だという声もある。「メンバーは20～50代で、ユニークな専門性をもっている人が多い。課題図書選びでも、それぞれの特色が出ておもしろいですよ」(濱田さん)

選書会では、例えば日本語の先生をしているメンバーは言語に関する本、コミュニティスペースを運営しているメンバーは公共に関する本といった具合に、それぞれが得意とする分野の本が持ち寄られる。読書会がはじまってからも、メンバーが多様な分、さまざまな視点が共有される。「自分では選ばない本に出会える」「ひとりで読んでいたら持てなかった視点が持てる」などと、読書会のよさを話すメンバーもいる。

何かと忙しい毎日の中で、強制的に本を読む機会がつけられるのも、読書会のよさのひとつだ。また、1冊につき1回程度のペースで回ってくるレジュメの作成は、大変だがいいアウトプットになるという。楽しいことは、必ずしもラクなことではないと気づかされる。

本を読むことは、SNSなどで画像や動画を見るよりもずっとエネルギーを使う。だからこそ、より複雑で高度な情報がそこにはある。「本のことを素直に話せる人って意外と少ない。そういう人たちと、みんなでお酒が飲めるのがいいですね」(黒木さん)

読書離れが叫ばれて久しい昨年、奥多摩の本好きたちはこうして集まり、知的な遊びに興じている。



## OKUTAMA Book Culture Journey 03

この日の読書会は、「ニュー駄菓子屋サンマ」(奥多摩町氷川151-1)にて開催

#### これまでの課題図書

「法のデザイン」水野祐 著(フィルムアート社)  
「暇と退屈の倫理学」園分功一郎 著(新潮社)  
「LISTEN——知性豊かで創造力がある人になれる」ケイト・マーフィ 著／篠田真貴子 監訳／松丸さとみ 翻訳(日経BP)  
「おいしさ」の錯覚 最新科学でわかった、美味の真実」チャールズ・スベンズ 著／長谷川圭 翻訳(KADOKAWA)  
「ピダハン——「言語本能」を超える文化と世界観」ダニエル・エヴェレット 著／屋代通子 翻訳(みすず書房)  
「プレイマタース 遊び心の哲学」ミゲル・シカル 著／松永伸司 翻訳(フィルムアート社)  
「ネコひねり問題」を超一流の科学者たちが全力で考えてみた「ネコの空中立ち直り反射」という驚くべき謎に迫る」グレゴリー・J・グバー 著／水谷淳 翻訳(ダイヤモンド社)  
「ヤンキーと地元 ——解体屋、風俗経営者、ヤミ業者になった沖縄の若者たち」打越正行 著(筑摩書房)  
「庭のかたちが生まれるとき 庭園の詩学と庭師の知恵」山内朋樹 著(フィルムアート社)  
「日本人とリズム感 ——「拍」をめぐる日本文化論」樋口桂子 著(青土社)  
「〈公正(フェアネス)〉を乗りこなす: 正義の反対は別の正義か」朱喜哲 著(太郎次郎社エディタス)

### おくたま読書会

例会:1か月に1回 選書会:4か月に1回  
※日程はSNSグループにて都度調整 ※見学・体験可  
X:@book\_okutama



## 絵本が広げる 素晴らしい世界

山や川、そこに生息する生き物たち…。身の回りの豊かな自然は、絵本の世界を通せば、また違う輝きを放つ。“奥多摩絵本専門士”の大島真理子さんがセレクトする奥多摩で読みたい絵本たち。



『どんぐり』たてのひろし／作・絵（小峰書店）

木からたくさんのどんぐりが落ちる場面からはじまり、森の生き物たちの営みが描かれている絵本。どんぐりはほとんどが死んでしまうが、誰かの糧になっている。文字はなく、精密で美しい絵のみでストーリーが進んでいく。



『森のいのち』『いっしょだよ』『だって春だもん』小寺卓矢／文・写真（アリス館）

星野道夫さんに憧れて写真家になったという小寺卓矢さんの、森の写真絵本三部作。「自然と人といのちのつながり」をテーマにしている。ひらがなで書かれていて、子どもも読みやすい。



『版画 はらうた』くどうなおこ／詩 ぼてはまたかし／画（童話屋）

野原にいる動植物が登場する詩と、素朴で楽しい版画の絵本。「奥多摩絵本の会」で毎回読んでいたため、「へびいちのすけ」は奥多摩の小学生にとって馴染みのキャラクター。



『クマよ』『森へ』星野道夫／文・写真（福音館書店）

『クマよ』は、アラスカに生きているクマを、四季を通して撮影したもの。『森へ』は、氷川小学校の6年生が授業で手書きのPOPを作成し、故・星野道夫さんの奥様にお送りしたところ、丁寧にお礼の手紙とカレンダーをいただいたことがある。



『とべバッタ』田島征三／作・絵（偕成社）

「自分にはまだ使っていない羽があるかもしれない。その羽を見つけて飛び立っていこう」というメッセージをくれる。力強い大胆な絵もいい。田島征三さんは約30年間日の出町に住んでいたことがあり、自然環境問題に取り組んだことでも有名。



『ピンクのいる山』『ピンク、べっこん』『ピンクとスノーじいさん』『ピンクパール!』村上康成／作・絵（徳間書店）

氷川小学校でよく読み聞かせをしていた絵本。「ピンク」という名のヤマメの生涯を描いたシリーズ。岐阜県生まれの村上康成さんは、子どもの頃から釣りが大好きだという。



『日本の川 たまがわ』村松昭／作・絵（偕成社）

多摩川の源流から東京湾までを、絵地図でたどる絵本。大きな地図にひらがなで説明が書かれているので、子どもにも理解しやすい。13ページには氷川小学校、15ページには古里小学校も描かれており、楽しく奥多摩を俯瞰できる。



OKUTAMA Book  
Culture Journey 04

絵本は心の栄養、人生の友達  
いくつになっても楽しめる

絵本専門士とは、絵本に関する高度な知識や技能をもち、絵本文化の普及活動を行う人のこと。大島真理子さんが絵本専門士になったのは、多摩地区で小学校の教員として定年まで勤め上げたのち、氷川小学校で図書支援員をしたことがきっかけだった。「素晴らしいことに氷川小では、校長先生をはじめすべての職員のみなさまが本好きでした。図書館も充実していて、それまでいろいろな学校で勤めてきましたがこんなに本好きが多い学校は初めてでした」

しかし、当時の氷川小では、放課後に子どもに絵本を読み聞かせる会が行われていなかった。ほかの地域でそうした会を見てきた大島さんは、絵本専門士の資格を取得し、自ら「絵本の会」を主宰するように。やがて古里や福生にも開催場所を増やし、絵本専門士仲間や学校関係者、地域の方々とともに今年で9年目を迎える。「絵本の会」では、そのときどきの季節や記念日などを反映したテーマの絵本が読まれ、子どもたちは本の世界に没入する。地方文化の紹介など学校では教わらない内容も多く、質問も飛び出す。豊かな学びの時間だ。「私たち自身も勉強になっています。読んであげるといよりは、一緒に読むという感じです」

絵本の会は、大人の参加者も歓迎している。「絵本は子どもだけのものではありません。大人が感動する本も、いっぱいあるんですよ。同じ絵本でも、そのときの自分の立ち位置や気持ち、環境によって見え方が変わるので、昔読んだ絵本を読み返してみるのもいいですね」

内容の受け取り方に正解はなく、千差万別でいい。赤ちゃんから高齢の方まで、年齢に関係なく楽しめるのが絵本だという。「絵本は心の栄養、人生の友達」と大島さん。人生のどこで開いても、絵本はまるで友達のように心に寄り添ってくれそうだ。

### 「絵本の会」



- 奥多摩・福生絵本の会：奥多摩文化会館と福生市にて年12回
  - 氷川絵本の会：氷川小学校にて年4回
  - 平和ってなんだろう：奥多摩文化会館等にて年3回
- ※このほかのイベントも不定期で開催  
※日程は各会場にて告知  
連絡先：mariko546@icloud.com

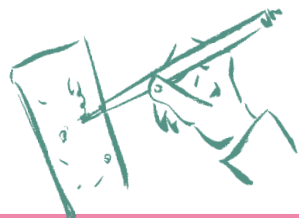
# The Art of Reading

## “よむ”技術と愉しみ

“よむ”対象は、本だけとは限らない。

ここでは、よめると愉しみが広がる【俳句】【古文書】【地図】のよみ方について、それぞれのプロフェッショナルに手ほどきを受けた。かくも奥深い、“よむ”世界へ。

The Art of  
Reading



## 【俳句】をよむ

気軽に詠み、読み合うことで  
感性も技術も磨かれる

お題:目借り時

シャネルのバッグ  
特売キャベツの列につく

麗らかやおむすび丸く握る母

育つ子に知る我が齢ひ水温む

早口で特許許可局春疾風

句会では、共感を呼ぶ内容や、誰もが见ているけど言語化されていなかった内容の句に票が集まりやすいという。奥多摩の句会で詠まれる句は、野生動物や自然の描写が多いそう。

句会の流れ

清書



選句



披講



講評

あらかじめ出されたお題(兼題)で、各自が複数の俳句を詠み、短冊に書いておく。このとき自分の名前は書かない。当日それらの短冊を回収してシャッフルし、専用の清記用紙に清書する。それを人数分コピーして配る。

制限時間内で清記された俳句を精読し、いいと思う句を8句選んで選句用紙に書き写す。このとき、最も気に入った句3つに「特選」の印をつけ、選句者として自分の名も書く。選句用紙は「披講」の担当者に提出する。

毎回持ち回りで決まる担当者が、清記用紙の俳句をひとつずつ声に出して読む。このとき、読まれた句を特選に選んだ人はその理由や感想を話し、書き手は名乗り出て句の意図を話す。種あかしを聞くようなおもしろさがある。

最後に、指導者がそれぞれの句を講評していく。大事なものは、句に発想や言葉選び、リズムなどの光るものがあり、それが際立つようにまとまっているかどうか。語順の入れ替えや言い直しなどをアドバイスすることもある。

### 教えてくれた人



鎌田俊さん、「河」奥多摩支部のみなさん  
2010年から奥多摩でスタートした、会員制俳句雑誌「河」による句会。「河」の副主宰である鎌田俊さんを指導者に、毎月10名ほどの会員が参加している。

「河」奥多摩支部の句会  
開催日:毎月第2火曜日 場所:奥多摩文化会館  
連絡先:森田紀子  
nori88237638@yahoo.co.jp  
※随時会員募集中

るんですが、何も知らない人が読んだときにどれだけ伝わるかは、自分ではわかりません。句会でお互いの句に感想を述べ合うことで、自分の思いとは少しズレて伝わっていたり、別の読み方をされていることがわかる場合もあります」

仮に意図とは違う読み方をされたとしても、自分の句に感想をもらえるのはうれしいもの。選句で選ばれればなおさら、もっと人の心に響く俳句を詠めるようになりたいと思える。そして俳句は、詠めば詠むほど自在に表現できるようになっていくという。五七五の型に感性が馴染み、テクニックも身につくのだ。

また、俳句をはじめると日々の過ごし方にも変化が訪れるという。「ある人が言うには、人生には大きな感動と小さな感動があって、俳句をしていると小さな感動を見つけられるようになると。確かに俳句を詠んでいると、ものをよく見るようになります。

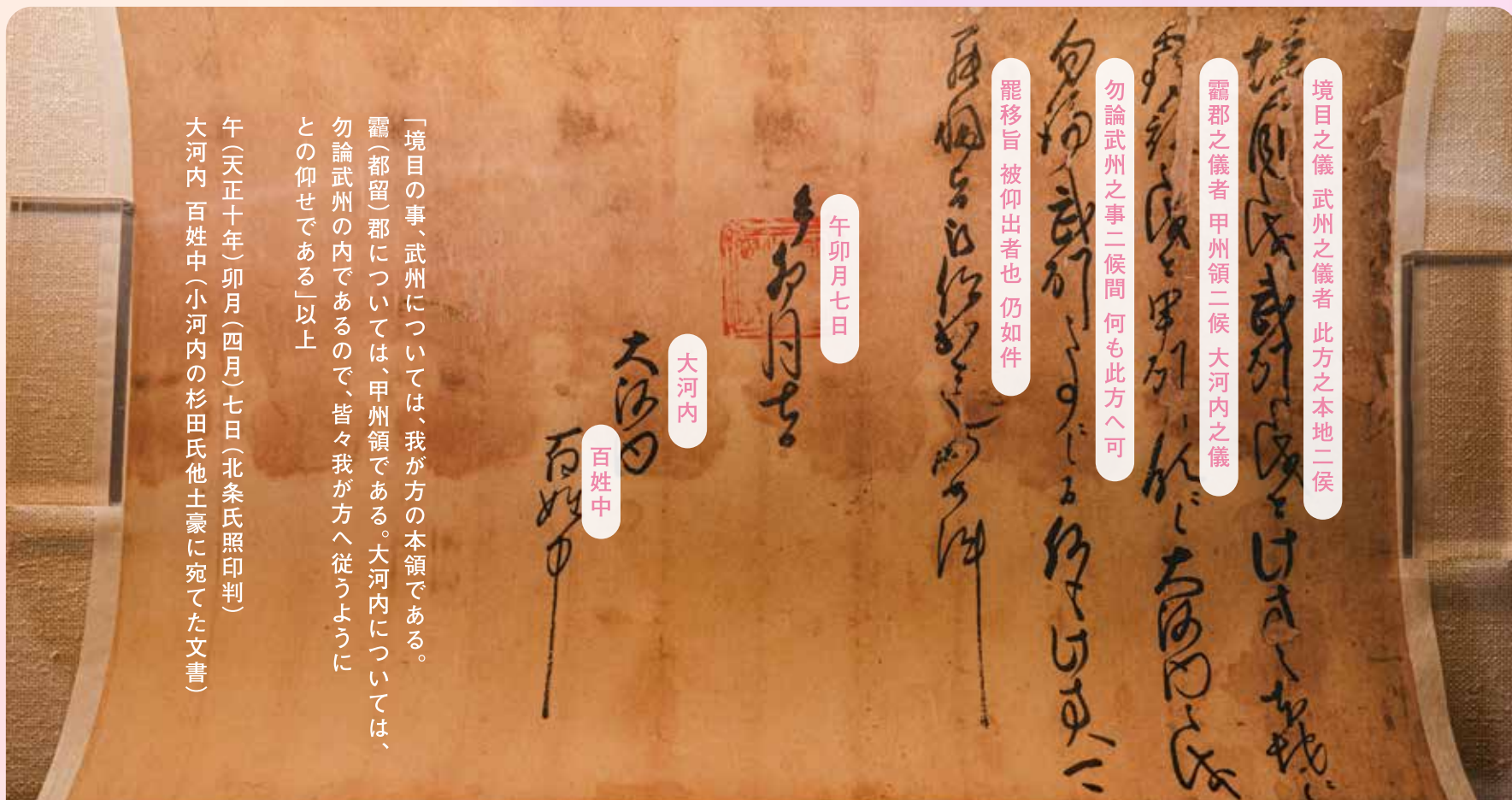
日々のたわいないことを  
積極的にももしろがる

「まずは、友達に話そうような感覚で、最近あったことを五七五のリズムで言ってみてください。ここ1週間や1か月を振り返って、おいしいものを食べたとか、どこかへ行ったとか、ふんしゃべっていることでいいです」

毎月、奥多摩文化会館で行われている「河」奥多摩支部の俳句の会。そこで指導をしている鎌田俊さんは、俳句を詠む(つくる)のに特別な知識は必要なく、身近なことを題材にすればいいと言う。

句を詠んで五七五のリズムに慣れてきたら、今度は季節集である『歳時記』を見ながら季節を取り入れてみる。さらに句会に参加すれば、自分の句を客観的に見ることができる。「一句詠むと、つい思いを言い尽くした気にな





奥多摩の古文書の一部は、「奥多摩 水と緑のふれあい館」に展示されている。写真は、天正10(1582)年頃に書かれた江戸時代以前の古文書(奥多摩町有形文化財・複製)。甲州と武州の国境についての文書で、杉田家が代々所蔵していたもの。

#### 難解とはいえ同じ日本語

#### 「なんとなくわかる」を手がかりに

奥多摩には古文書が数多く残っている。江戸時代、奥多摩町域には16か村があり、各村には名主・組頭・百姓代の村方三役が置かれ(※)、村の中から選ばれた村方三役が村政を担っていた。村に役所がなかったため、行政文書は各自で保管されていたが、明治22年市制町村制の施行により、16か村を統合し小河内村・氷川村・古里村の3か村として発足、それぞれに村役場が置かれたことで、村役場に保管されるようになった。このような経緯から、村方三役をつとめた家や寺社に関係していた家に、多くの古文書が残されたのだ。

「古文書を見ていると、実はご近所さんや知り合いの家に由来のものだったりする。実はごく身近な存在なんです」

こう話すのは、奥多摩の古文書を解説する「奥多摩古文書研究会」の川崎渚さん。会で

も、解説中に自身や知人の先祖の名前を発見することもあるという。

古文書には、結婚・離婚・出生・死亡といった戸籍に関することや、年貢、借入・貸付、生業など、生活にまつわるあらゆる記録が残されている。元神主家の古文書には、参詣者の記録が詳細に記されていたり、どれも解説するほどに当時の人々の暮らしが見えてくる。地名もほとんど変わっておらず、時を超えてローカルな情報を共有する楽しさがある。

古文書に親しむもっとも簡単な方法は、古文書研究会が解説し、活字化した奥多摩町教育委員会発行の「奥多摩町史料集」を読むことだ。図書館に置かれ、奥多摩水と緑のふれあい館で販売もされている。「杉田家文書」「坂田家文書」と家ごとにまとめられており、これまでに62冊が刊行。現在も年1〜2冊のペースで作成しているが、現存する古文書の量が多く、まだまだ解説は終わらないという。

一方、古文書そのものを読むのは簡単ではな

い。その分、読めた時のよろこびもひとしおだ。

「パズルや地道な作業が好きなのは、結構ハマると思います」と川崎さん。具体的には、専用の辞書の中から、部首ごとだったり、しらみつぶしに当たったりして、書かれている文字を一つひとつ特定していく。それでもわからないところは、文字の前後を見て単語の用例を調べたり、文脈から推測する。

「古文書には、“候(そうろう)文”という文末に“候”がつく文語体が使われていて、“御座候”など、現代にはない言い回しが出てくる。“如件(くだんのごとし)”など決まり文句もあるので、そういったものから覚えると良いと思います」

一見難しそうだが、元を正せば同じ日本語。慣れれば、案外理解できてしまうという。「何度も見ていると、目が文字の形を覚えてきて、なんとなく読めるようになります。古文書研究会のメンバーも、ゼロからスタートしている方が多いですが、今ではスラスラと解説されています。まずは一文字、読める字を見つけてみてください」

#### 教えてくれた人



奥多摩古文書研究会 川崎 渚さん  
学芸員。大学時代から古文書に親しみ、「奥多摩古文書研究会」に入会。同会は1985年刊行の「奥多摩町誌」編纂のために古文書を調査・解説したことがはじまり。これまで「奥多摩町史料集」62号分の解説を担う。現在は会員9人で解説や整理・研究を行っている。

「奥多摩古文書研究会」  
開催日:毎月第2・4金曜 場所:奥多摩文化会館  
連絡:0428-86-2731 奥多摩 水と緑のふれあい館 ※随時会員募集中

祖先が残した記録から、  
在りし日の奥多摩を読む



「奥多摩町史料集」と古文書の読解に欠かせない辞書。もっとも出番の多いくずし字の辞典は、漢字辞典のように部首もしくは読み方から引く。どちらもハッキリわからない場合は、文字の見た目や文脈からあたりをつけて探していく。ほかに、古文書ならではの用語がわかる用語辞典や、ひらがなのくずし字がわかるかな字典なども使う。



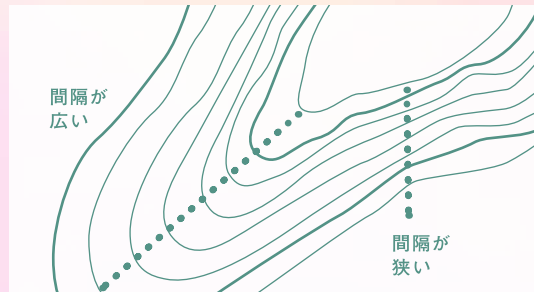
登山用地図の王道は「山と高原地図」(旺文社)。ほかに、草花など特定の情報に詳しいもの、交通機関の案内が載っているものなど、さまざまなバリエーションがある。自分に合うものを探そう。写真は、レンジャーのみなさんの仕事道具。



奥多摩の山は「逆さお椀型」  
奥多摩の山は、山頂付近は平らでも、はじまりと終わりの傾斜が急なのが特徴。下りの最後に道に迷い、滑落してしまう事故も多い。

写真:東京都レンジャー

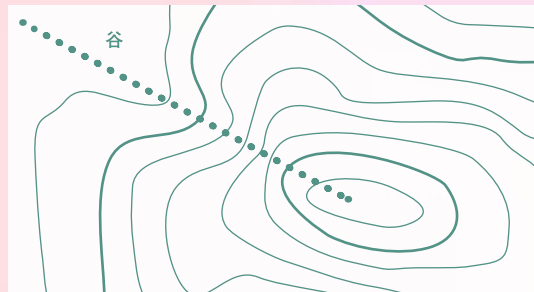
#### 「等高線」のよみかた



間隔が広い  
間隔が狭い  
等高線の線と線の間隔は、高さ10mを表している。間隔が広い場所はそのぶん平らで、狭くなるほど坂が険しい。等高線がびっしりつまっているところには崖がある。

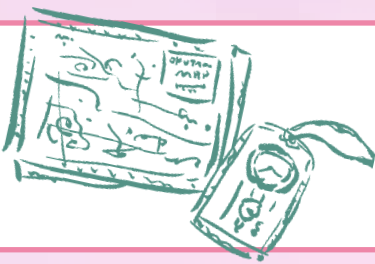


山頂から下に出張っているのが尾根  
等高線の尾根と谷の見分けがつけば、山の危険をかなり回避できる。尾根を表す線は、付近の山頂から低い方へ出張っている。



山頂に向かって突き出ているのが谷  
谷を表す線は、山頂や尾根など高い所に向かって突き出ている。シワの中心にはよく沢があり、谷が深いほど線の間隔は狭い。

The Art of  
Reading



## 【地図】をよむ

地図読みで広がる、  
“机上登山”の楽しみ

#### 安全な登山のためにも リュックには紙の地図

東京都レンジャーをご存知だろうか。彼らの仕事は、都内の自然公園の自然と登山者を守ること。毎日山に入り、登山道や道標の点検、動植物の観察など、さまざまな活動をしている。「地図がないと仕事ができない」というレンジャーのみなさんに、地図の読み方を教えてもらった。

東京の山は、林道や水道管理の道など登山道以外の道が多く、全国でも長野や富山に次いで遭難事故が多発しているという。安全な登山のために、地図は欠かせない。最近は登山地図アプリを使う人も増えているが、アプリだけに頼ると、周囲の地形や自分の全体的な位置関係を把握できないまま歩いてしまうことがある。登りと下りでコースタイムが大幅に違えば、それだけ急な傾斜があると予想できる。一見小さくて簡単に登れそうな山が、実は険しく事故が多いというケースも、地図をきちんと読めばあらかじめ見抜けるようになるという。

では、どんな紙の地図を使えばいいのだろう。「日本の地図は、すべて国土交通省の機関「国土地理院」が発行する地形図がベース。

地形図の購入も可能ですが、おすすめは民間会社が発行する地図。コースタイムや危ない場所、見どころなどの情報が盛り込まれ、充実しています。どの地図も毎年更新されるので、なるべく新しいほうがいいでしょう」

地図を手に入れたら、山に行く前に「机上登山」をしよう。「どこから登って、どれくらいで頂上に着いて、どこでごはんを食べるか、そのためには何時に家を出ればいいのか。計画を立てながら、地図上で山に登るんです。机上登山は安全のためにすることですが、それだけでも楽しいですよ」

地図によって違いはあれど、「凡例」を確認しながらよく見ると、そこには情報が詰まっている。針葉樹や紅葉樹の多さは地図記号で示されているし、見晴らしのいい所も等高線からわかる。登りと下りでコースタイムが大幅に違えば、それだけ急な傾斜があると予想できる。一見小さくて簡単に登れそうな山が、実は険しく事故が多いというケースも、地図をきちんと読めばあらかじめ見抜けるようになるという。

また、地図にはほとんど書き込みをしよう。「地図をきれいに持ち帰る必要はありません。通り道を蛍光ペンでなぞったり、時間を書い

たり、メモ帳のように使ってください」

いざ山に入ってから、ときどき地図を広げ、鳥瞰で自分のいる場所の確認を。その後の予定を立てやすくなり、紛らわしい道や危険な場所も避けられる。山を見る解像度がぐっと上がり、より安全に、より楽しく登山ができるはずだ。



「東京都 自然公園利用  
ルールガイド」配布中!



鈴木唯士さん 山崎香織さん  
長野純子さん 岸正夫さん  
東京都レンジャー・奥多摩地区のメンバーとして奥多摩の山を巡視。登山道や道標の補修、登山者へのマナー啓発などの業務を、ボランティアの奥多摩サポートレンジャーとともにやっている。

「東京都レンジャー 奥多摩地区」  
場所:奥多摩町氷川171-1  
連絡:0428-83-3271  
Instagram: @tokyo\_natural\_parks  
「奥多摩サポートレンジャー会」  
Web:https://okutama-sr.jp.org





## 01 しろまるカフェ

カヤック体験を提供する「グラビティ奥多摩ベース」の後藤めぐみさんが、湖畔でオープンしているカフェ。後藤さんは、一度何かにハマるとそれに関連する本をとことん読むタイプ。たくさんの本を自宅から持ち込み、「ビジネス」「焚き火」「体の使い方」などとテーマ別に並べている。また、「1ダース文庫」という私設図書館を展開しており、カフェに出入りする本好きの4名が、それぞれおすすめの12冊をセレクトして置いている。すべて店内で読むことはもちろん、貸りすることもできる。「本好きの人とつながりたい」と後藤さん。お気に入りの席で読書をしにくるお客さんも多いという。

奥多摩町白丸48-2  
毎週火曜日と満月の日に営業  
13:00~20:00  
X:@shiromarucafe



## 本を読みたくなるカフェ

# Best Cafes for Book Lovers

## 02 KIKORI CAFE

2023年にオープンした見晴らしのいいカフェ。店主の小澤宗一郎さんが、木工作家だったお父様の喫茶&ギャラリーを継いではじめた。小澤さんも木工が得意で、店の内装も自ら手がけた。オープン前にDIYをしているとき、P3に登場した「おくたま文庫」の岡村さんに相談され、店内に「おくたま文庫」の棚を設置することに。小澤さんは本は読まないけれど、「本の背表紙が、インテリアの差し色になる」と、瞬時にイメージできたそう。その美意識から、陳列された本の背がズレないよう、毎日整えているのだとか。本は自由に読めて、気に入れば購入できる。地元の人も観光客も、よく買っていくという。



奥多摩町棚澤403  
10:00~17:00  
不定休  
Tel.0428-85-1444



## 03 PORT OKUTAMA

JR奥多摩駅2階にある複合ショップ&カフェ。まず目に入るのは、カレーやクラフトビールを提供する「SOBATARO CAFE」のカウンター。その隣にはスペシャルティコーヒー専門店「Gotta Coffee」。奥へ進み、各種お土産と中古アウトドア用品店「Maunga」コーナーを過ぎた先に、漫画やアウトドア本、一般書が並ぶ小さな本棚が。「奥のスペースは、奥多摩の子ども達が安心して居られる場所にしたいとゲーム各種の他に本棚も置きました」と店主の松越章太郎さん。数年前の氷川小学校6年生が手作りした「奥多摩町厳選ガイドブック」も店内に展示している。



奥多摩町氷川210 JR奥多摩駅2階  
11:00~17:00、土日祝は~17:30  
※夜営業する日もあり 不定休  
Tel.0428-85-8630



奥多摩町川野1740 (山のふるさと村内)  
10:00~※ランチはL.O14:30、カフェはL.O16:00  
火・水曜休み (8月と11月は火曜日のみ定休)  
Tel.0428-86-2552



## 04 ごはん Cafe やませみ

山のふるさと村内にあり、四季折々の借景が美しいカフェレストラン。広々とした店内には、こだわりのブックコーナーを数カ所設置。例えば入口付近には、自然・アウトドア系の図鑑や書籍、ガイドブックなど、キッズコーナーでは仕掛け絵本や大型絵本などなど。店主セレクトの多彩な本を手にとって愉しめる。「本も好きだし、絵本も大好き。古典もそうですが、読む時の心情や年齢でも解釈が変わるからいくつになっても飽きないですね」と、店主の内田陽子さん。P7で紹介したヤマメの「ピンク」シリーズの大ファンでもあり、マグカップや絵はがきなど絵本作家・村上康成氏のグッズも販売。

## 05 Cafe Kuala

2024年春にリニューアルオープンした氷川キャンプ場内にある一軒家カフェ。オリジナルブランド「TOKYO OKUTAMA FACTORY」の柚子バター等の加工食品、おすすめの雑貨を販売する物販スペースの隣に、カフェエリアをDIYで設置。本好きのスタッフたちによる提案で、ゆっくり読書を愉しめる場所にと「おくたま文庫」のコーナーを新たに設けた。「山やアウトドアにまつわる本、雑誌、小説など幅広く選書してもらっています。絵本は、外国人のお客さんにも人気ですね」と担当の西さん。なお、カフェが休みの平日でもスタッフがいれば、「おくたま文庫」の利用OK。町内の常連客も多いそう。本は1冊100円から。



奥多摩町氷川702 (氷川キャンプ場内)  
カフェは土日祝営業  
10:30~16:00



## 06 山鳩

鳩ノ巣駅から徒歩1分のところにある家族経営のカフェ。入り口付近の本棚には、小説やエッセイ、絵本などが置かれている。はじめは、本が好きなオーナーの原島俊二さんが、「山鳩文庫」と名付けた小さな本棚に、お気に入りの本を入れていたこと。特に好きなのは、登山家でありイラストレーターの辻まことさんの本だとか。その後、P5で紹介した「まちライブラリー」をスタート。お客さんが待ち時間に読めるようにと本を用意し、息子の秀伍さんのDIYで、本棚も大きくした。また、奥多摩関連の本の販売も行っている。

奥多摩町棚澤380  
10:00~17:00  
月曜・第3火曜 (月・祝の場合は翌日)  
Tel.0428-85-2158





GO! GO! やまびこ号!

集落巡る、  
地域密着型図書館。

やまびこ号

氷川ルートは境、留浦、峰谷、原、日原など、古里ルートは梅沢、大丹波、白丸、海沢などへ巡回。図書館利用カードを持っていなくても車上で直接、利用申請が可能。借りた本はやまびこ号、古里図書館、氷川図書館のどこへ返却してもOKだ。巡回の日時や場所は下記ウェブをチェック。

<https://www.okutama.library.ne.jp/guide/bm/>

奥多摩の山奥で、  
本と人をつなぎ続けて

奥多摩のとある山中。どこからともなく一台の軽自動車がやってきたかと思えば、スピーカーから「となりのトトロ」のテーマソングが優しく流れ始めた。すると付近の住民が軽自動車の付近に数名、集まってくる。2週間に一度のお楽しみ、読みたかった本を借りるという大切な時間だ。軽自動車の名は移動図書館「やまびこ号」。町内にある氷川図書館や古里図書館の利用が困難な地域に住む住民へ、本を届ける山間地域ならではのサービスだ。指定管理者として町立図書館運営を担う一般財団法人奥多摩木村奨学会の森田哲哉さんはこう話す。

「ネットの影響もあって活字離れや紙離れは進んでいますし、町内の人口も減り続けています。でも読書を楽しんでいらっしゃる町民の方はまだまだたくさんいて、その思いに応えたいと思っています。その昔はバスにぎっしり本を積んで各地域を回っていて、どこに行っても子どもたちが集まってきたと聞きました。今、利用してくださるのはほとんどが高齢者の方々ですね」

たとえば老人ホームを訪問した時には利用者から好みの本のリクエストを受け、次の訪問時にその本を届ける。あるいは連続した小説を読んでいる利用者には、ちょうど読み終わったタイミングで次の巻が読めるよう、準備して届ける。また、希望があれば利用者が家に不在の時は、宅配ボックス等に本を置いていくなど個別対応も行うほど、手厚いサービスを続けているという。

「第1・第3火曜は氷川ルート、第2・第4火曜は古里ルートをそれぞれ巡回し、1日で10から11箇所本をお届けしたり、回収したりしますが、1箇所でも多くても5人程度のご利用と多くはありません。でも、密に交流できるので日常の見守りにもなりますし、その方の好みを知れて次の訪問時にその方が喜びそうな選書を心掛け、お届けすることもできます」

「やまびこ号」の巡回を担当する八嶽ひとみさん、柏木杏子さんにも話を聞くと、「届け先の方のことを思い浮かべながら選書し、予想通り、その方が喜んでくださると気持ちがいい」といったコメントも聞かれた。まさに、奥多摩ならではの血の通った本のコンシェルジュサービスである。

また、図書館では町内の保育園、小学校、中学校とも連携し、貸出しのための本の入れ替えを小まめに実施。保育園では子どもたちへの読み聞かせや紙芝居などに、小中学校には読書の楽しさを丹念に伝える目的にと、力を尽くしているという。森田さんほか、メンバー全員の優しさで温かさによって支えられている地域密着型図書館。町内全域へ、いつまでも本の楽しさを伝えてほしいと願うばかりだ。

ルールに縛られない  
小さな手作りの図書館

スマホに費やす時間が増えたのと引き換えに、本を読む機会が減っている。そういう人は多いだろう。もっと本と親しむ機会を増やすための取り組みとして、在仏経験のある編集者の吉田真緒さんは、マイクロ・ライブラリー活動を挙げる。「フランスにいた約1年半、大小100近いまちを訪ねましたが、路上や公園などにパブリックな本箱が設置されているのをよく見かけました。『リトル・フリー・ライブラリー』や『マイクロ・ライブラリー』などといった、フランスでは『Boîte à Lire (読書の箱)』『Boîte à Livres (本の箱)』などと呼ばれています。中の本は誰でも自由に借りられる。また、自分の本を入れてもいい。貸し出し期限はなく、名前や連絡先など個人情報を提供する必要もない。もちろん無料。様々な本との出会いを気軽に楽しめる取り組みです」。いわば、小さな手作りの図書館。そんな取り組みが奥多摩でもできたらと、「BLUE+GREEN LIBRARY 奥多摩の小さな図書館」を立ち上げ、多機能型地域活性化カフェ「奥多摩AUBA」に設置した。貸したり借りたり譲ったり。町を行き交う誰しにも、この図書館を通して気軽に本の循環を楽しんでもらえたら幸いだ。

教えてくれた人



PROFILE  
吉田真緒さん

ライター・編集者。早稲田大学第二文学部卒業。編集制作会社勤務を経て2012年に独立。6～19才まで奥多摩で過ごし、東京→南フランス→青森と引越しを重ね、現在横浜在住。



フランス各地で見かけたマイクロライブラリー。本箱のデザインもさまざまでおもしろい

本棚は、DIYを得意とするKIKORI CAFEの店主・小澤さんに製作を依頼。塗装は、同じくDIYが趣味の本誌カメラマン、イワイコオイチさんが担当。まさに手づくりの図書館だ

BLUE+GREEN  
LIBRARY

奥多摩の小さな図書館

カフェ「奥多摩AUBA」(奥多摩町氷川197-5)に設置。誰もが自由に本の貸し借りや交換ができる小さな図書館。最初の図書は、BLUE+GREEN JOURNALを制作する奥多摩にある編集・制作会社、(株)ミゲルが作った書籍や雑誌たち(背にマスキングテープが付いているもの)。利用者が活用することで、本棚の中身がどんどん変わることを期待したい。



The Shared Book Revolution  
マイクロライブラリーのすすめ

## Welcome to OKUTAMA TOWN

東京の森へ移住定住のススメ

都下での生活と自然豊かな環境を両立する奥多摩町では、移住・定住者を迎えるために、さまざまな支援を行なっている。住宅支援や子育て支援制度も充実しており、ファミリー世帯にも暮らしやすい町だ。

### 移住・定住応援補助金

奥多摩町では、次代を担う若者等の定住を応援するため、定住を目的として住宅の購入・リフォーム等をした方に対して、事業費10万円以上で、事業費の1/2以内、最大200万円の補助金を交付します。事業補助金の限度額200万円を超えて、次の条件に当てはまる場合は、町内で使える各々10万円ずつの商品券を上乗せして支給します。  
1) 奥多摩町内に所在する事業所等に事業を依頼した場合  
2) 壁、床等に地場木材(多摩産材)を10㎡以上使用した場合  
◎年齢条件 以下の方を対象にしています。  
●45歳以下の夫婦 ●18歳以下の子どもを持つ世帯  
●35歳以下の方

### その他

いなか暮らし支援住宅、空家バンク制度、安く家が借りられる町営若者住宅、多子家庭の助成制度など、ほかに町定および子育てにまつわるさまざまな支援を行っています。

お問い合わせ：奥多摩町定住応援総合窓口 Tel.0428 83 2310 <http://www.town.okutama.tokyo.jp>

### 住宅資金借入の利子補給

奥多摩町に定住を目的とした住宅の購入・リフォーム等をされた方に、金融機関などからの資金借入に対する利子補給を行っています。条件は、400万円以上の融資を受け、償還期間が10年以上であること。町内金融機関を利用する場合は、最大年額33万円まで補給します。給付期間は36カ月。  
◎年齢条件 以下の方を対象にしています。  
●45歳以下の夫婦  
●18歳以下の子どもを持つ世帯  
●35歳以下の方

### 子育て支援

子育てのしやすい町をめざし、子育て支援事業を行っています。入園・入学・進学等の支援や、中学制服代、高校生通学定期代など、子育てを頑張っている方への負担を軽減するための助成があります。

Edit & Text & Photo: Yukiko Soda [miguell] Miguel Utsunomiya [miguell] Art direction: Atsushi Kodani Design: Yasuko Kitaguchi Illustration: Toshiyuki Hirano  
発行:東京都奥多摩町 <https://www.town.okutama.tokyo.jp> 編集&制作:株式会社ミゲル 〒198-0101 東京都西多摩郡奥多摩町大丹波640 [miguell@dg8.so-net.ne.jp](mailto:miguell@dg8.so-net.ne.jp) <http://www.miguell-web.info>  
2025年3月発行 本誌は奥多摩町内の各観光施設、協力店などで配布しています。店頭などで無料配布にご協力いただける施設を募集中です。ぜひお問い合わせください。  
COVER STORY / たくさんの本に囲まれた空間にいと、心落ち着くという人は多いだろう。そんな架空の図書室の1シーンを描いた



